

本渡市文化財調査報告第2集

宗像家調査報告書

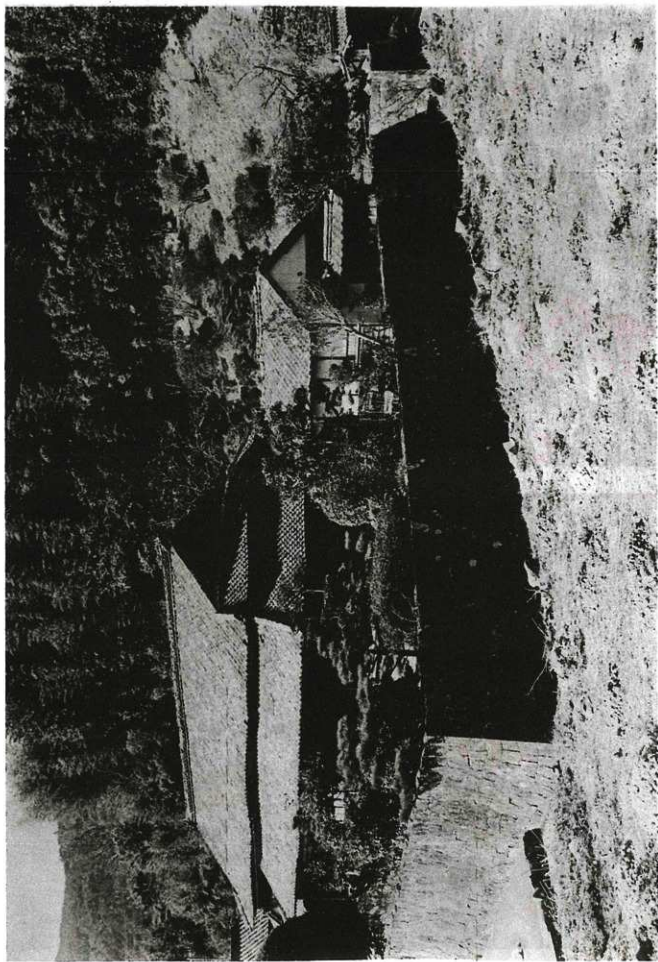
—旧楠浦村庄屋役宅—

1983

本渡市教育委員会



旧 桶浦村古絵図



宗像家全景

発刊によせて

私たちが住んできた家もこの地球から考えると自然の一部であり、人間社会における生活文化のひとつであります。又、近代建築の根源でもあります。しかし、時の流れの中で建築も近代化され、古い建物は消え去る運命にあります。家の調査も民族の歴史の歩みを知ることであり、建築史そのものでもあります。消え去ろうとする古い建物は、様式、内容的なものを考えても天草に各種ありますが、今回は旧庄屋の役宅のうち、現存するものの中で最も当時のままで残されている楠浦町の宗像家の建築調査を実施いたしました。

本書は、その報告書であり、史的文化財（建造物）として記録、保存され、また今後の調査の基礎資料となれば幸であります。

最後に、長期間にわたり調査にご尽力いただいた金子信雄氏他、ご協力いただいた各位、又、今回特に調査についてご快諾いただき、多大なご協力をいただいた宗像家の皆様に、心より厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

本渡市教育委員会

教育長 浦上恒雄

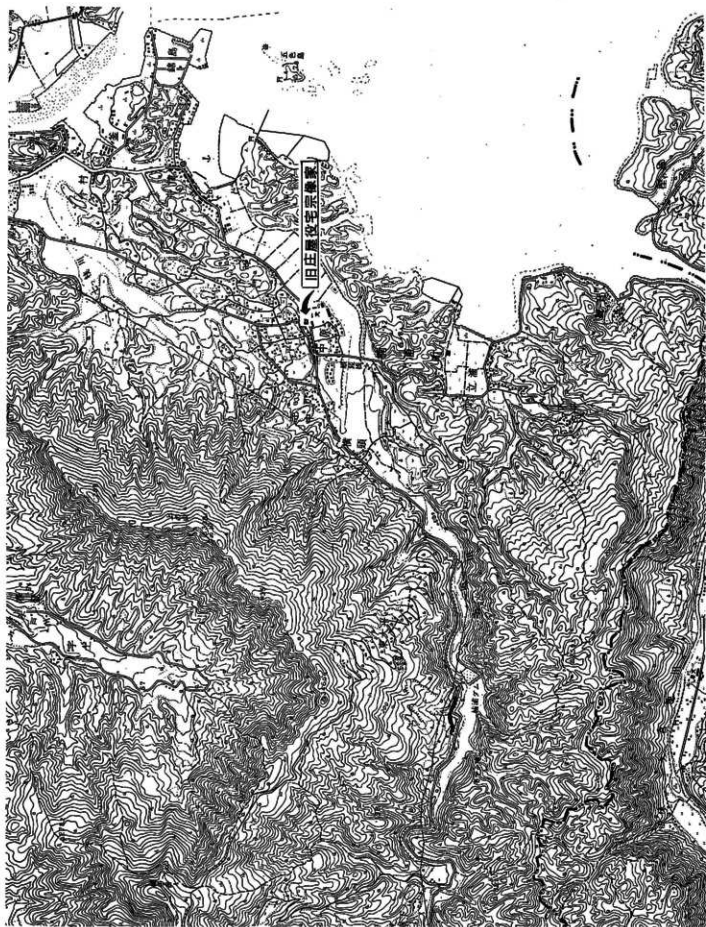
例 言

1. 本書は、熊本県本渡市楠浦町久保2971番地に所在する旧楠浦村庄屋役宅の調査報告書である。
2. 調査は昭和55年11月から昭和56年3月の期間に実施した。
3. 本書の執筆は金子信雄氏(1級建築士)に依頼した。
4. 本書に掲載した実測図は金子信雄氏、鈴木高一氏(助手)が実測した。
写真は、前田二氏が撮影し、拓本は平田豊弘学芸員がとった。
5. 本書の編集は、本渡市教育委員会が行った。

——目次——

発刊によせて	教育長 浦上恒雄	1
I 位置と沿革		5
1. 位置		5
2. 沿革		5
II 規模と構造		6
1. 規模		6
2. 構造		6
III 主要部分の解説		7
1. 基礎		7
2. 土間		8
3. 居間		8
4. 広間		8
5. 仏間		9
6. 文書部屋		9
7. 本座敷		9
8. 離部屋、回廊、風呂、便所		10
9. 軒、軒ウラ		10
10. 内門		11
11. 排水		11
12. その他		11
図面	1～14	
図版	1～33	

あとがき



宗像家付近の地図(25000分の1)

I 創立と沿革

1. 位置

天草は、九州の西部に位置し、大矢野島、天草上島、天草下島など大小約120の島々からなる。本渡市は天草島のほぼ中央にあり、下島の東部と上島の西部を占め、東は有明海、南は不知火海に面している。平野部はきわめて狭く、さほど高くない山から海岸部に向かって伸びる傾斜地が多く、ナラ、マツ、クス、カシ等が二次林を形成し、ツツジ、シダ類が繁茂している。海岸は浅浅で周辺海域は有数の漁場となっている。

現在、宗像家の役宅跡は本渡市楠浦町久保2971番地に所在する。楠浦地区は、方原川沿い海岸にかけて栄えたところで、江戸時代(天草は天領であった。)は本戸組に属し宗像氏が庄屋として村政にあたった。その役宅跡は村の中央の小高い丘を背にして南向きに立地し、西は方原川が形成する小規模な扇状地、東は江戸時代後期からの開拓による新田が広がっている。南前方には、立浦方面から突出した丘陵が墨根を連ねて伸びている。本来このあたりは、内湾した海岸の景観であったろうと思われる。

2. 沿革

宗像家は代々庄屋を務めてきた大きな家である。先祖は福岡県宗像郡から江戸元禄年間に天草に移り住んだといわれている。現存する建物の建築年代については、はっきりした物証はないが家人の話などからほぼ170年位前であろうと思われる。第13代当主宗像健因が幼少の頃、建築現場に来てはいたづらするので宮田の役座宅にあづけられたというエピソードもあると聞く。とすれば健因が没したのが明治17年(66歳)であったことから江戸末期という推測がされる。又、天草島内ではっきりしているのが天草町高浜の上田家が文化11年(1814)であり、平面構造等比較しても良く似ていることなどからも推定される。

明治16年宗像家の菩提寺である宗心寺が建立されている。同寺の屋根瓦が天草瓦と呼ばれるものであるが、そのおり宗像家もカヤ藁から瓦へ屋根がえがなされたと思われる。棟札を失したのもおそらくこの時ではないだろうか。

近世になってかなりの修復がなされているが、これほど当時の形態を残している建物は天草でも数少く、貴重な文化遺産である。

宗像家歴代一覧

遠祖 掃部助統次		九代 兼左衛門貞治	寛政5丑年12月9日没
初代 儀左衛門	寛文6午年3月19日没	十代 三郎兵衛農綱	没年不詳
二代 次郎左衛門武虎	寛文13丑年10月10日没	十一代 素右衛門久保	天保13寅年11月21日没
三代 孫兵衛尉	元禄14巳年3月17日没	十二代 治部右衛門義保	天保13寅年正月20日没
四代 治部之丞	元禄15午年9月6日没	十三代 堅固久義	明治17申年4月25日没
五代 治部右衛門	宝暦元未年11月11日没	十四代 松彦	明治44年9月4日没
六代 曾右衛門統久	宝暦9卯年12月13日没	十五代 義雄	早世
七代 外記右衛門	明和2酉年10月14日没	十六代 寛(義雄の嫡男)	昭和55年1月17日没
八代 喜久左衛門	天明6午年3月25日没	十七代 秀明(寛の嫡男)	

Ⅱ規模・構造

1. 規 模

桁 行	21.633メートル(本間12間)
梁 行 東側	11.822メートル(6間)
西側	10.8メートル(5,5間)
座敷縁柱の出	0.835メートル
軒 出	0.8メートル
軒 高	4.850メートル(16尺)
本屋床面積	252.6平方メートル
本屋建築面積	275.01平方メートル
建物延面積	686.4平方メートル

2. 構 造

桁行十二間、梁行六間、入母屋、瓦葺、
基礎 礎石自然石、周囲雨落葛石鑿切仕上げ
軸部、和小屋、二重空梁、一部登り梁仕様
輪廻り 化粧野地板、化粧垂木(60×70)四面隅木
屋根入母屋造り、ゲヤ引おろし
内部造作 仏間、書院、床間(群雲すり)
奥座敷17センチメートル(5寸7分)上り
広間 化粧樫太、油桶、タバコボン棚、神棚、造りつけ棚、
囲炉裏、カタヌキ、欄間、板戸
外部 内門、廻りわりの石垣、山圍、排水口

以上のような構造形式になっている。詳細にわたっては後記するが、非常に細部にわたって造られたものである。

建築面積も延686.4平方メートルと普通の家の10倍近くもあり、部屋も18畳の大広間、15畳の居間、10畳の本座敷等部屋数だけで計11室もある。庄屋屋敷らしく、本座敷は一段高くなっており、(後世に修理し下げた。)柱も他の部屋はまちまちであるが4寸5分(14センチメートル)と統一され、壁に至っては、現代では不可能とされる群雲造りであることが特徴である。又、造り方も書院造りであり数寄屋造りの影響も大である。

2. 土 間

裏玄関を入ると、左に3畳の下男部屋がある。土間より50cm高くなっており座敷よりも低い。土間のほぼ中央広間側から上り段がある。この材質は楠の木である。又、1尺1寸4分(34.5cm)9寸4分(28.5cm)7寸(21.2cm)と3本の柱が特徴であり、椎の木の太木からとったものであろう。

今はもう見ることは出来ないが奥にはかまどを持ちその上には写真のようなもみ置場もある。もみ置場は220×320の大梁と登り梁とによって支えをつくり実に合理的に造られている。(図版6)

3. 居 間(15畳)

この部屋は茶の間として使われていたようである。現在は取り除いてあるが真中に囲炉裏を持ち、その自在カギをつす竹の支柱だけが残されている。しかし、スズで黒く光った柱、梁、建具は当時を思い出されるものである。この部屋は構造的に他と違う。もちろんゲヤの部分であることもあろうが登り梁(合掌造り)となっていることである。これは飛騨高山地方の合掌づくりに見ることが出来るのだが大きな部屋を造る時に有効な技術のひとつである。近世になって野地及び桁部分が修理されたのは明らかであるが、登り梁は当初からのものであることは確かである。これは楠材にそれだけのすぐれた大工がいたことを証明するものである。

又、ガス燈が配置されており現在もなおその形を残している。これもまた、宗像家が新しいものを一早く取り入れた証しとなるものである。

内装仕上表

天井	化粧野地板、化粧タル木、化粧梁
壁	土カベ下地、シックイ仕上げ
床	本間タタミ 955×1,910(3尺1寸5×6尺3寸)

北側展開図(第8図)の障子部分は後世になってかえたものであるが、板戸引違いは建築当初のものである。これは一見押入か、棚があるかのようにみえるが戸袋とされておりカモフラージュである。

東側展開図(第8図)の建具及び棚は建築当初のままであり、椎の木を主体としたものである。又、建具が3本引きになっているのだが1本だけ小さく、これも又、棚のようにみえる。こういった所に実用だけでなく、デザインの的にもよく考えられたものである。(図版7、8、9)

西側立面(第9図)からみることのできるガラス十障子戸は、後世になって取りかえたものである。

南側の6本の障子は建築当初のものであり、割りつけが1対3、又、サンにおいても1対2と明確な寸法となっている。

4. 広 間(18畳)

対外的な場所として使用され、村役及び御用部屋として使用していたようである。広間用の玄関を持ちヤリ置きなどの場所も備えられている。1尺1寸4分(35cm四方)の椎の柱を中心に袖棚、2階に続く階段、つくりもしっかりした造り付けの棚もっている。仏間8畳とつづきで、現在まで残る「2間つづきの和室」という天草特有のものである。(図版10.1.1)

開口の取り方で気付け事は、北と東、南と西というように対照になっている。

又、1尺1寸4分(35cm)の柱が椎の木であるが、板戸(西展開図)の板部分も又椎の板である。これはおそらく一本の木から取ったものであり、昔から天草には椎の木が多かったことを物語っている。

内部仕上表

天井	化粧根太、松板7分化粧敷き、3間梁化粧
壁	真壁、土カベ下地 ジュラク
床	本間タタミ 955×1,910(第6、7図)

5. 仏間(8畳)

仏間の特徴を上げるとすれば、まず式台があることであろう。又、丸柱、斗拱をもつ仏殿のつくりは弾宗用の極めであり、格式高いものである。フスマに張られた色紙は後世のものが多いが「十戒の掛軸」などが存在し、現在も仏教を修める人には貴重なものである。又、納戸からも直接来れるようになっており信心深さを感じると共に部屋の配置が仏間を中心とした間取りになっている。(図版12)

内部仕上表

天井	竿縁天井 天井板杉
壁	土カベ ジュラク
床	タタミ 955×1,910(3尺1寸5×6尺3寸)

他の部屋と違って欄間を持ち、これを持つのは奥座敷とこの仏間だけであるが、調差シと鴨居が同じになっているのは、奥座敷をのぞいた他の部屋と同じである。(第10図)

6. 文書部屋

南側式台の横に2畳位の広さの文書部屋がある。年貢、人別表、御用日誌等文書部屋として使われていたようである。

この文書部屋の前の格子は建築当初のものであり、昔のおもかげを残している。又、クギなど写真のように和クギになっており、建築時の苦勞が伝わってくる。(図版13、14)

7. 本座敷

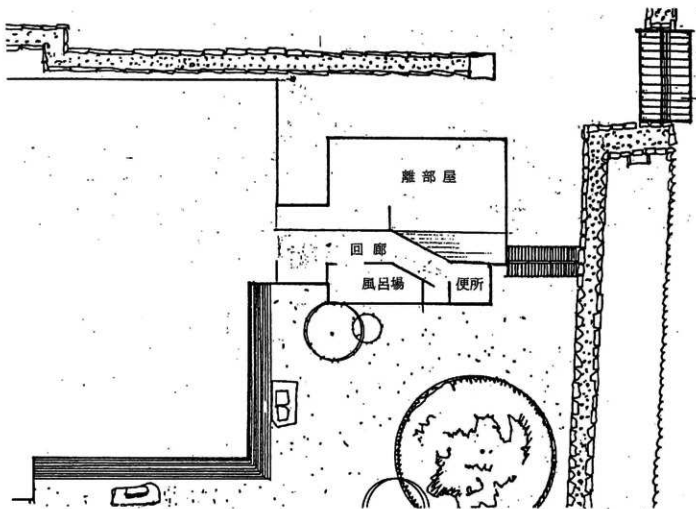
現在、本座敷10畳は他の部屋と同レベルになっている。これは後世になって修理したものである。建築当初は他の部屋より5寸7分(17cm)高くなっており、これは内法の10分の1にあたり形式にあっている。又、書院を持ち本格的な造りとなっている。床の間は群雲ぬりになっており現在では大変むずかしい手法である。その左側の板床の間は後世に修理したものであろうが、敷居を切っており、もとは押入であったと考えられる。長押カクシクキ打ちとすべてに関して本格的である。又、他の部屋の柱がまちまちであるのに対して、4寸5分(14cm)で統一しており、この部屋に特別の配慮を加えたことは確かである。(図版15、16、17)

内部仕上表

天井	竿縁天井 天井板 杉板重ね
壁	群雲ぬり 土カベ下地
床	タタミ 本間用 955×1,910(3尺1寸5×6尺3寸)

※ 現在は同レベルに修理しているが、図面は建築当初の形態で設計した。

図面でわかるように現在5寸7分(17cm)下げた。(第11図)



8. 離部屋、回廊、風呂、便所

本座敷を通り控の間を通ぎると離部屋につながる回廊がある。回廊のわきの洗面所、その奥の風呂場、便所と配置されている。回廊が写真のように折れ曲っているのは便所が直接見えないようにすること、臭気が直接本座敷に来るのを防ぐためでもある。

風呂場は石灰入りたき土間となっており桶風呂の機子を今も伝えている。これは普通家人が利用するのではなく代官所役人等客人が利用したのであろう。又、この風呂場にはタキ口がなく湯をわかして外側の入口から湯を注ぎ込んでいたものであろう。座敷を始めとしていかに対外的な面に心配りがあったかが推測できる。(図版18、19、20)

9. 軒、軒ウラ

化粧野地及び化粧垂木となっており、いずれも杉である。特に奥座敷は写真のように母屋、隅木とも化粧となっている。

図に見ることができるように隅木部許りは³方形造り軒桁仕口³となっており複雑を極めており柱、敷桁、桁がで⁴あう所に使われる。

日本の木工品に使われる複雑な仕口の一例であるが、デザインと複雑からいって極めて美しいが、これを刻んでびたり合わせるには、非常な慎重さと精密さを必要とする。名声を博している日本の木組を示す顕著な例を宗像家でも見ることが出来る。

健園初夢の図でこの下にすわっている姿が今なお感じさせる空間でもある。(第13図)(図版20、21)

10. 内 門

現在はツゲの植込みになってしまった裏門を入ると正面に式台、表玄関がある。それを過ぎると本座敷の庭に通じるところに内門がある。今はその敷石しかないが図のような平面図のもとに昔のおもかげを残している。柱型のところには支柱の腐食を防ぐために水切りが切っており、石工の知恵を感じる。

又、現在植込みになっている門は、竹パイであったとのこと。この内門をくぐるとコケむした石垣で囲まれ奥座敷の様子を一層格調高いものになっている。(第13図、図版23、24)

11. 排水について

今日、我々が建築を設計するとき、排水をどのように行うか重要な問題点である。

宗像家には、精度の高い排水溝が造られている。自然石を軒の線にそって囲っており、又、家庭内排水は井戸、風呂場から田んぼへと直接結ばれ、田地への水取りに十分有効であるように設計され少しの無駄もない。雨水も石垣の中から畑の中へと実に合理的に造られている。写真で見ることができるが1回排水マスに流れ、それから暗渠を通して畑の中に水が注ぐように設計されている。現在も充分その役割を果たしている。(第12図 図版25、26)

12. その他

(1) 石垣刻印洪水誌

六	九	明	洪
月	年	治	水
六			
日	戊丙	十	誌

明治19年6月6日、方原川の氾らんによる洪水でこの高さまで水が上がってきたという刻印である。

これは宗像家の屋敷を巡らす石垣正面部分下から2段目に刻まれている。(図版31)

参考文献

「昭和45年度熊本県民家緊急調査概報」

昭和46年3月発行

熊本県教育委員会

「天草建設文化史」

昭和53年5月3日発行

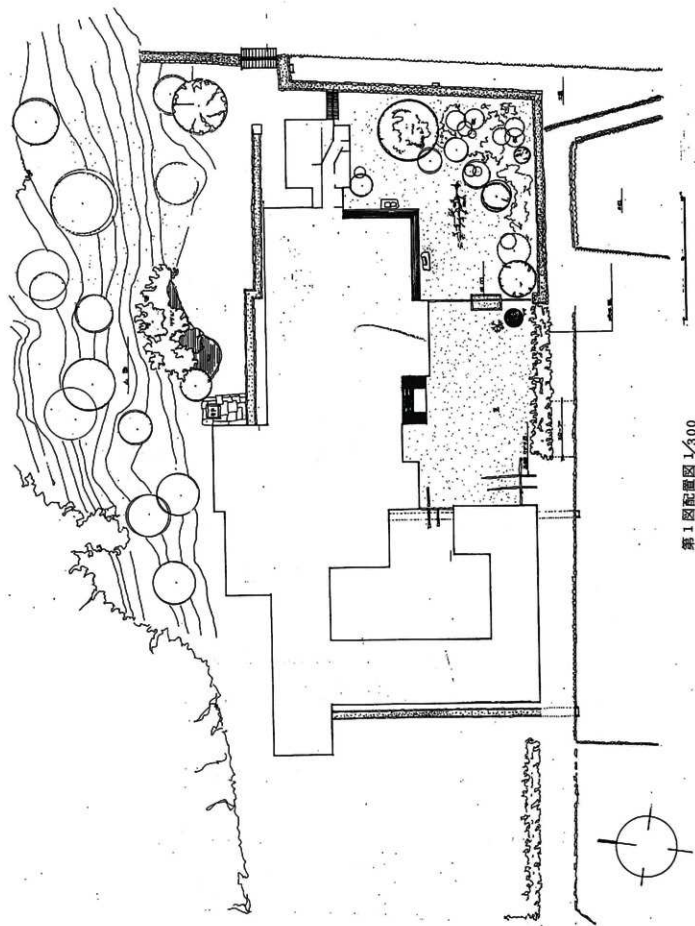
社団法人天草地区建設業協会

「天草近代年譜」

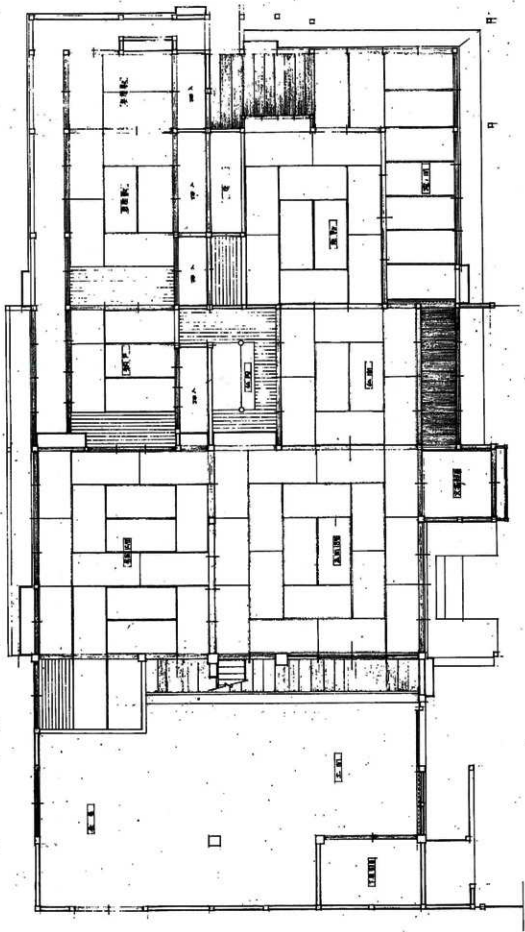
昭和48年9月30日発行

松田唯雄著

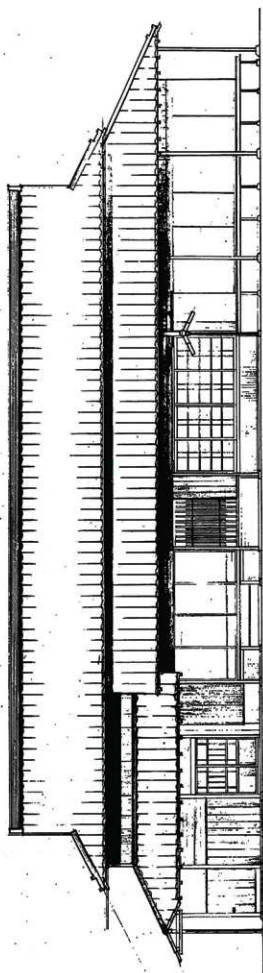
面 図



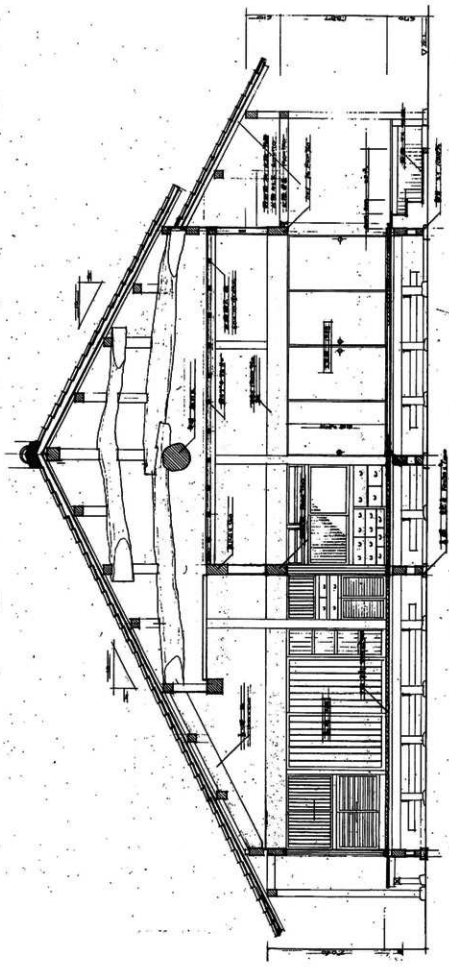
第1図配置図 1/300



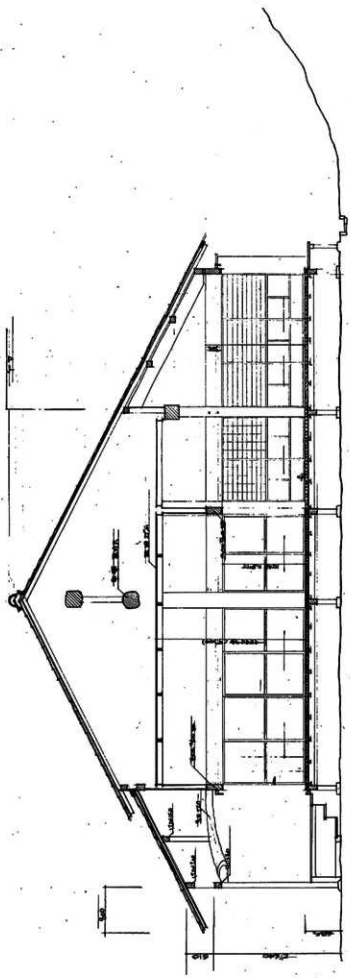
第2图平面图 1/100



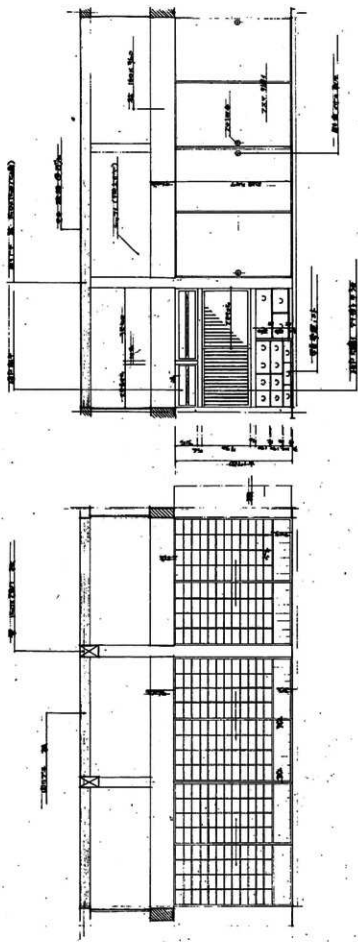
第 3 图 南立面图 1/100



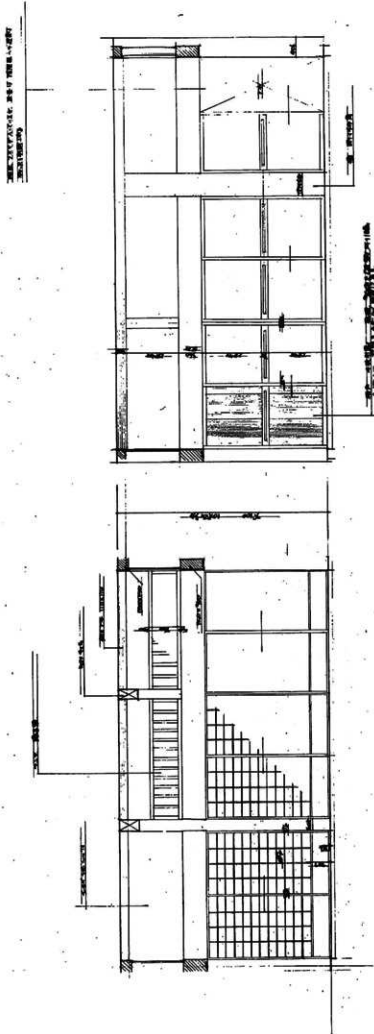
第4図 矩計圖 1/60



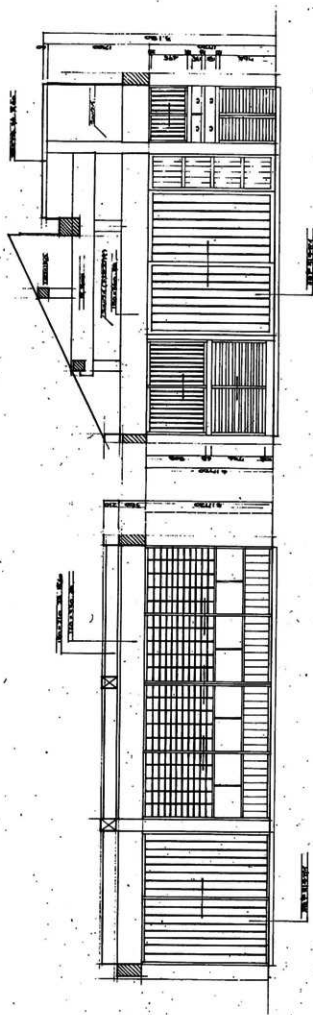
第5图 断面图 1/100



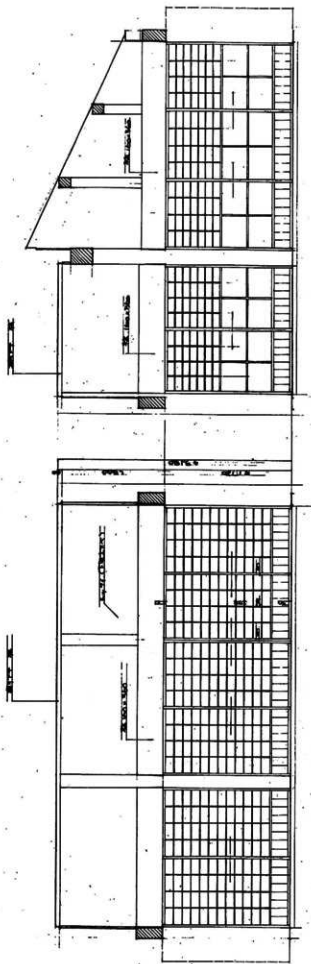
第6図 広間展開図(南西) 1/60



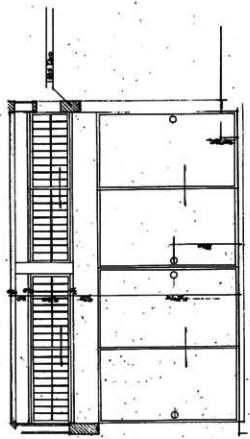
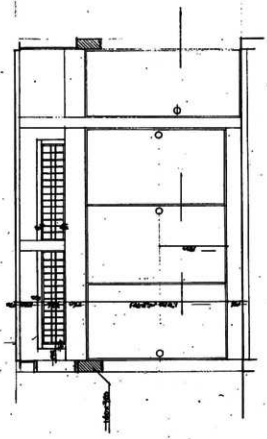
第7圖 広間展開図(北東) 1/60



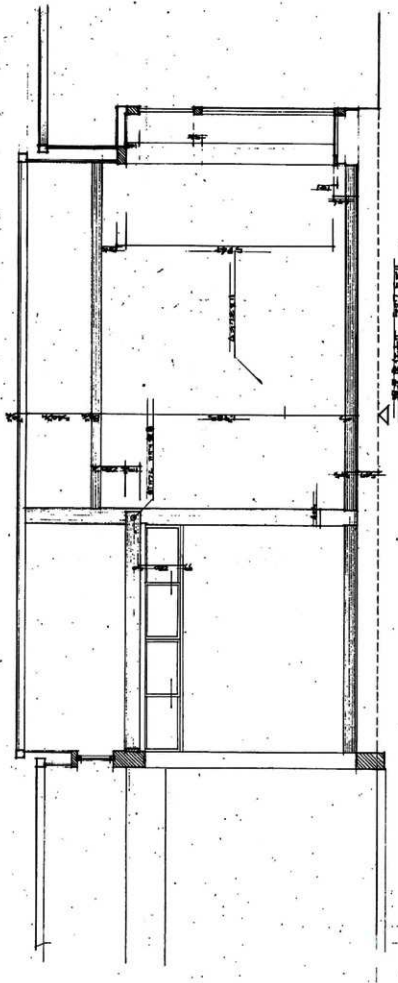
第 8 図 居間展開図 (北東) 1/60



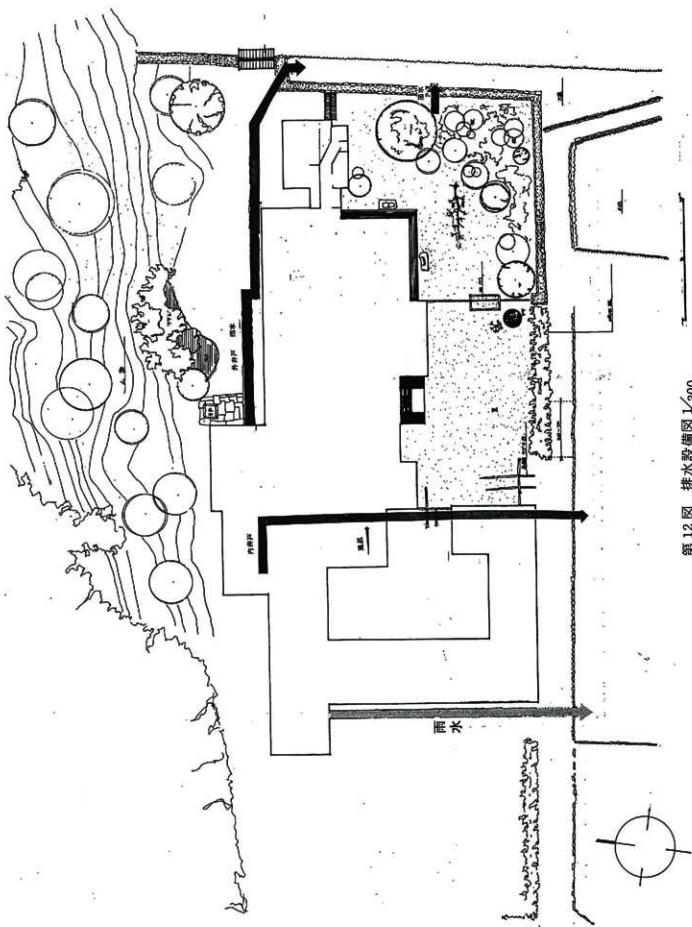
第9図 居間展開図(南西) 1/60



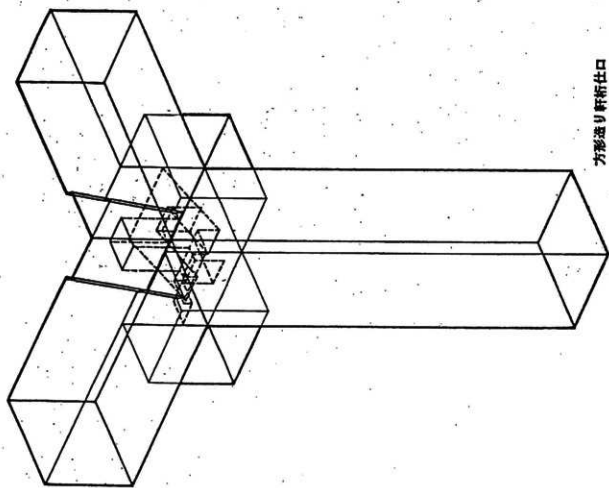
第10圖 仏間展開図 1/60



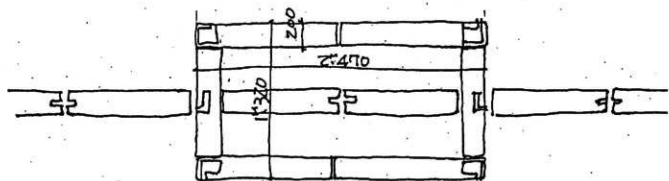
第 11 図 本座敷展開図 1/40



第 12 图 排水設備圖 1/300

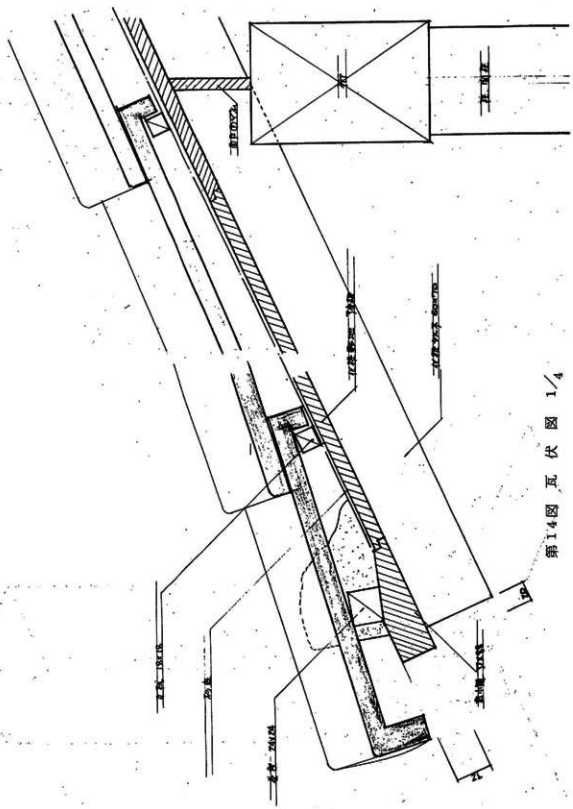


方形造り軒折仕口



1/3

第13図 方形造り軒折仕口図(左)
内門敷石図(右)



第14圖瓦伏圖 1/4

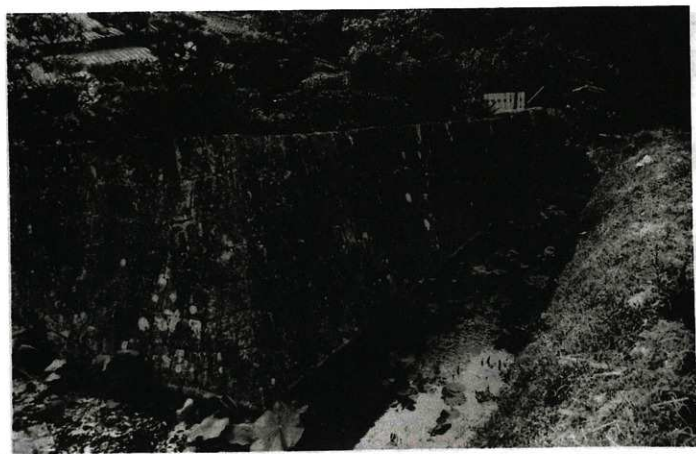
圖 版



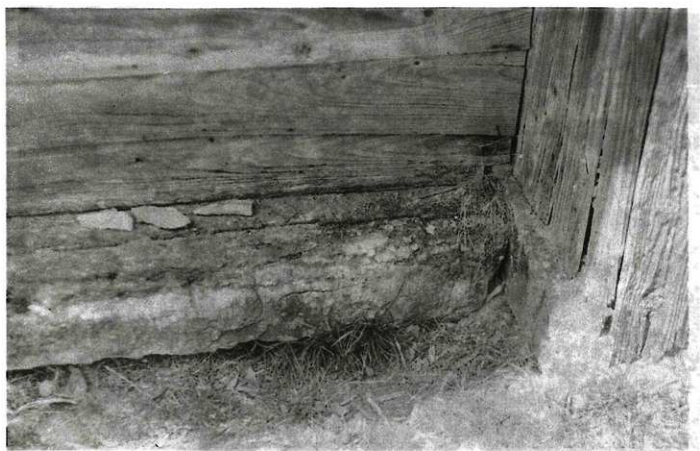
図版1 宗像健固によって行われた新田近況(上)釜の迫掘り切り(下)



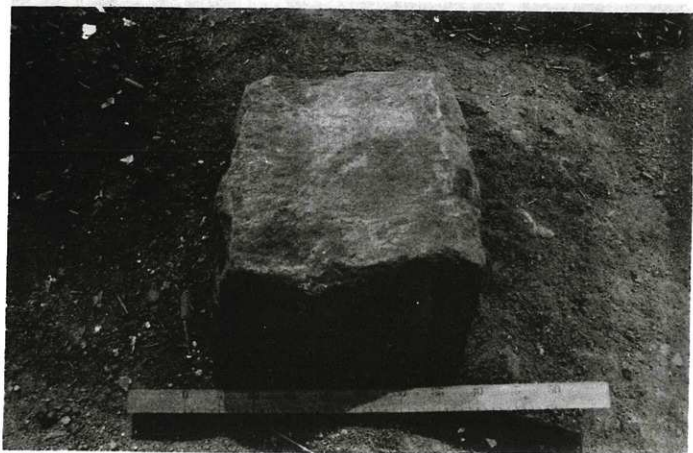
図版2 旧大宮地村とを結ぶ眼鏡橋(上) 旧役宅正面(下)



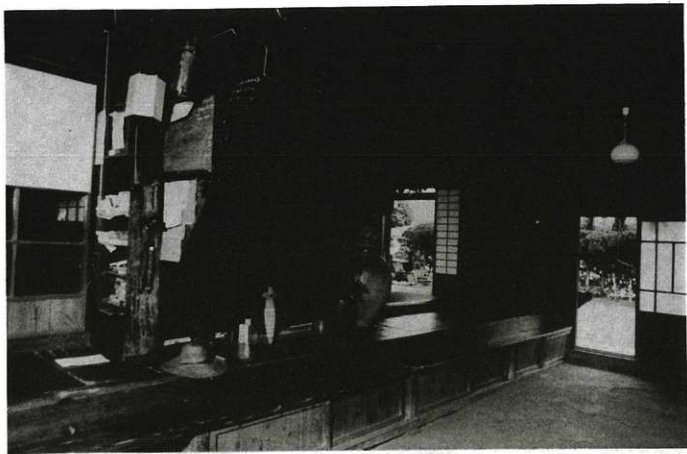
図版3 屋敷裏の自然を利用した山園(上)屋敷まわりの石垣(下)



（上）仏間前敷石（下）離部屋敷石



図版5 雁部屋束石(上)
控間束石、柱番号が残っている。(下)

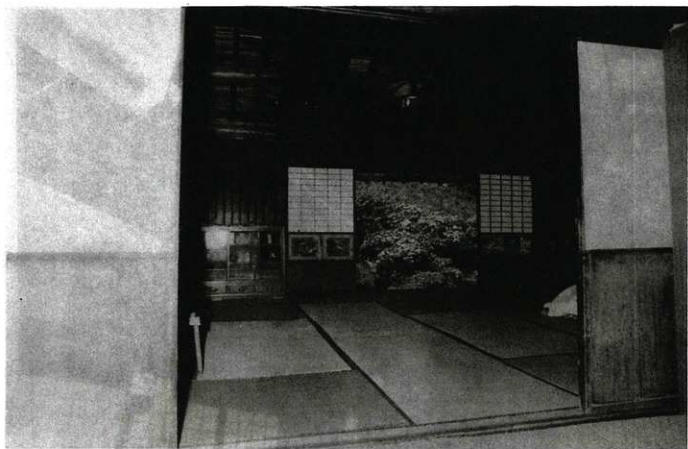


図版6 土間(上)モミ置場(下)



図版7 居間天井(上)(下)
登り梁(合掌作り)





(上) 書天間 (下) 居間
百葉窓 (左) 障子

図版 8 居間 (広間から見る) (上) 居間、造り付け欄 (下)

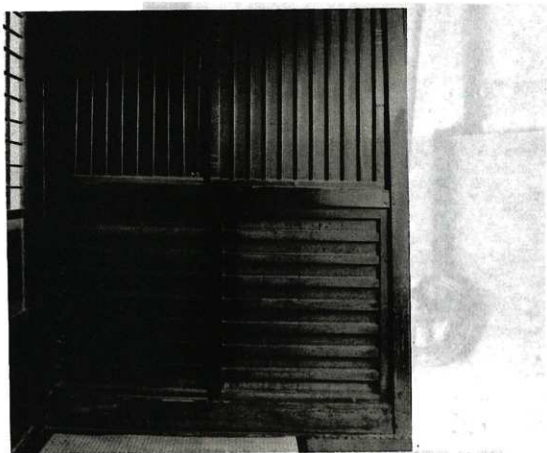
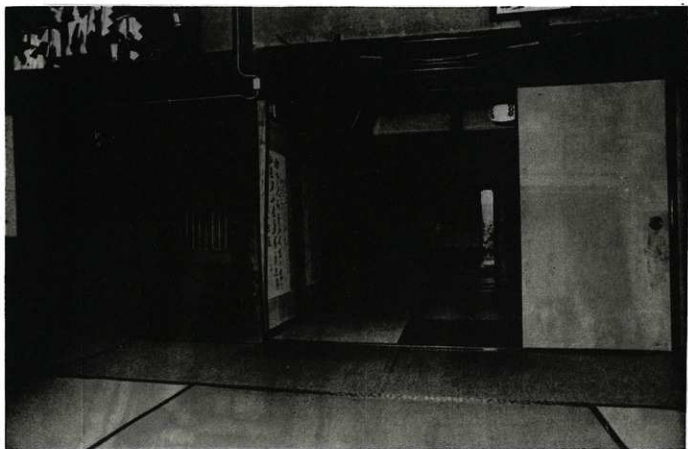


図9版 居間溢り付け柵(上)(下)



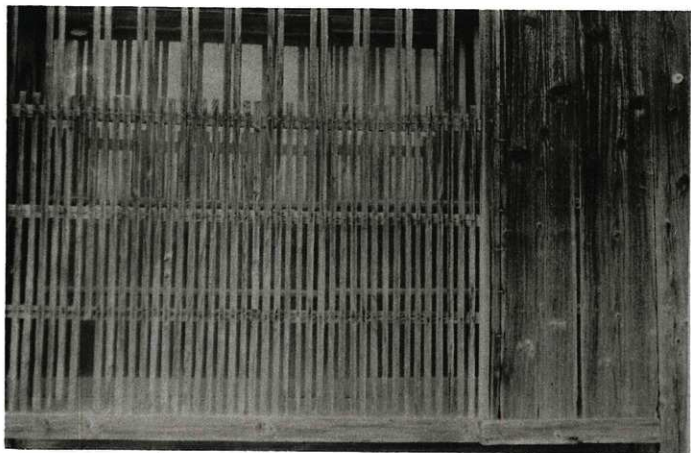
図版 10 広間神棚下造り付け棚(上) ガス燈配管跡(下)



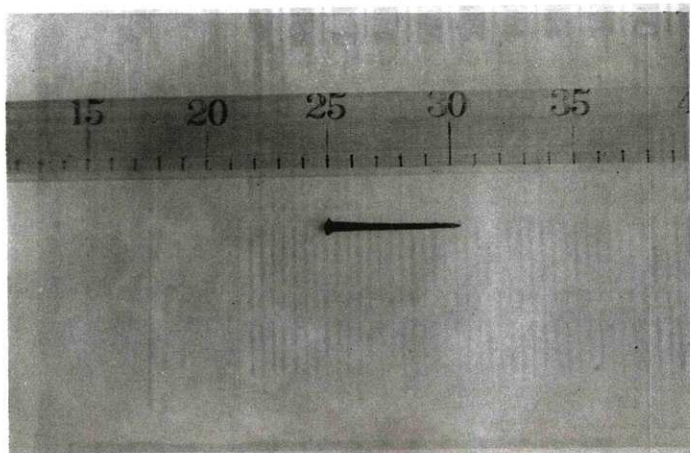
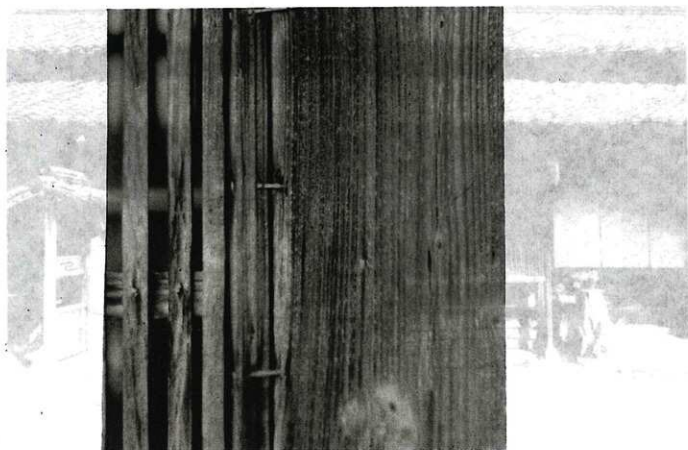
図版 11 広間(上) 表玄関より広間をみる(下)



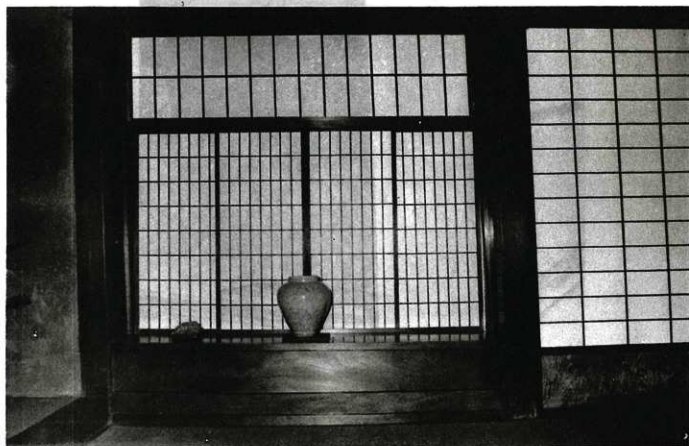
図版 12 仏壇(上) 仏間フスマ(下)



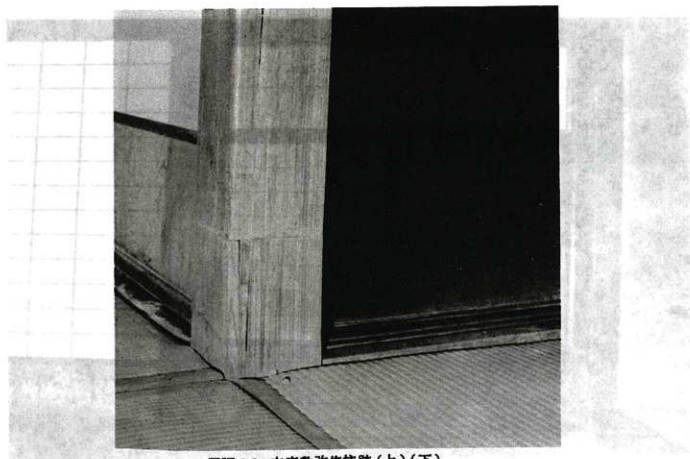
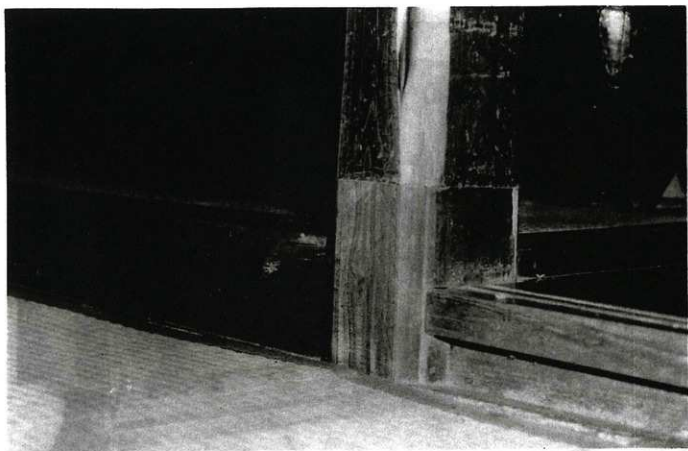
図版 13 文書部屋 外部格子(上) 格子近景(下)



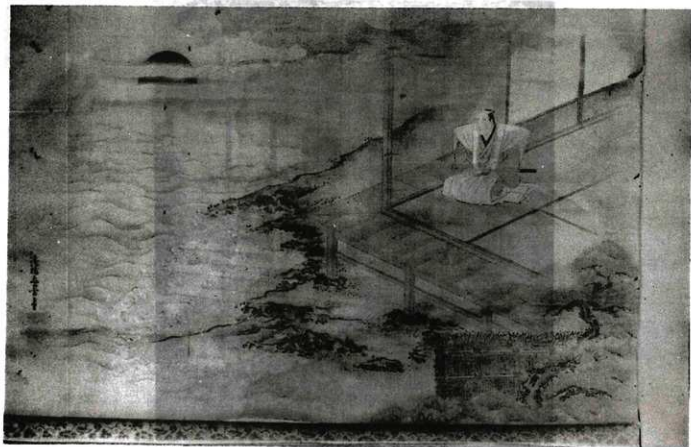
図版 14 格子固定和クギの状況(上) 和クギ(下)



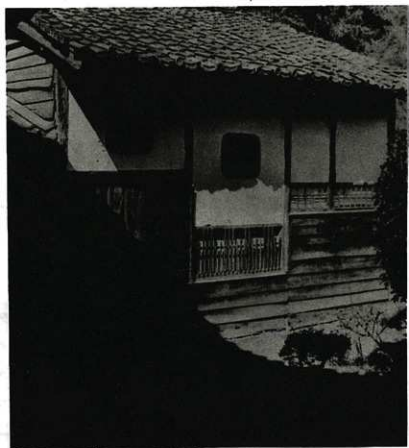
図版 15 本座敷床の間(上) 同書院(下)



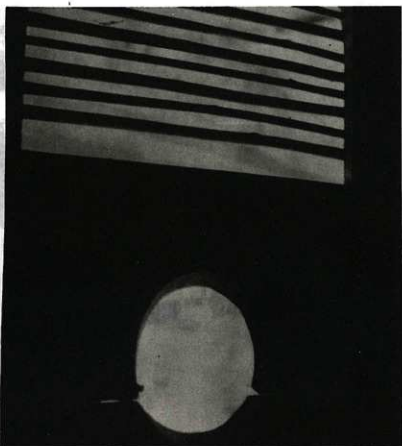
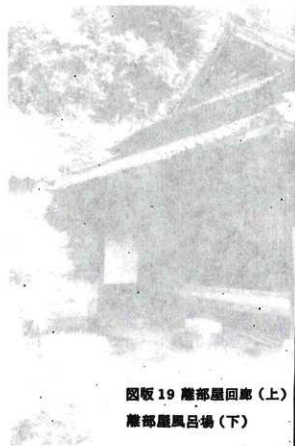
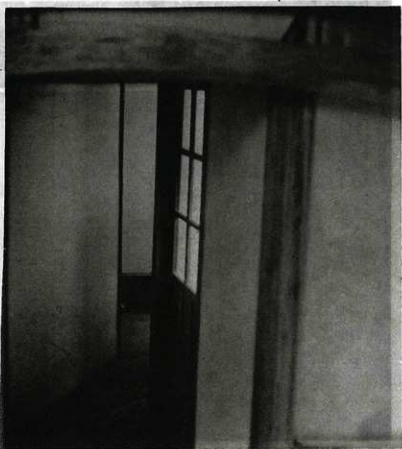
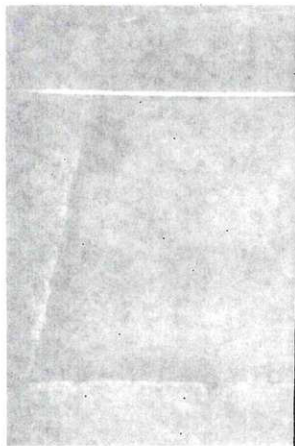
図版 16 本座敷改修柱跡(上)(下)



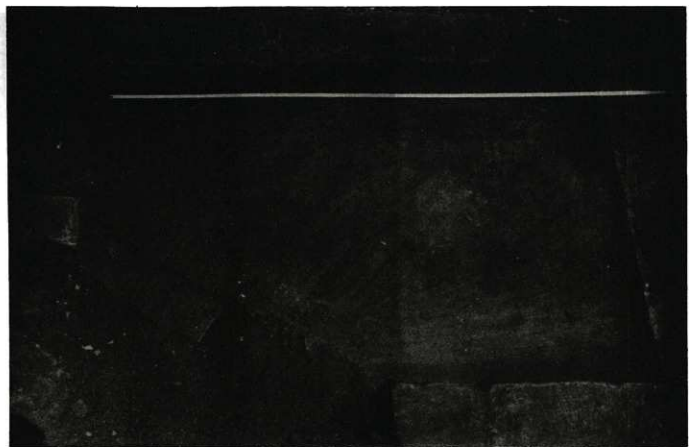
図版 17 本座敷近景(奥は仏間)(上) 健固初夢の図(下)



図版 18 雑部屋外景(上)(下)



図版 19 離部屋回廊(上)
離部屋風呂場(下)



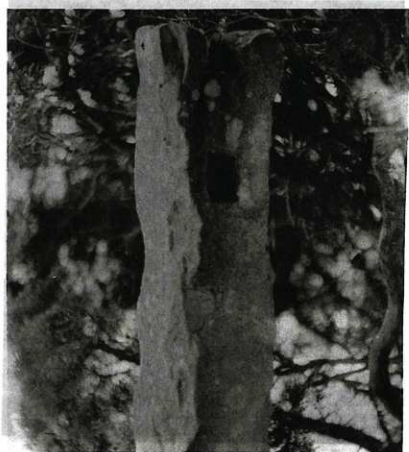
図版 20 風呂湯跡(上) 本座敷回廊外觀(下)



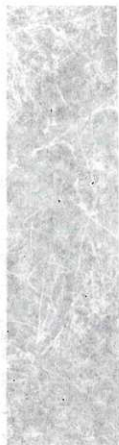
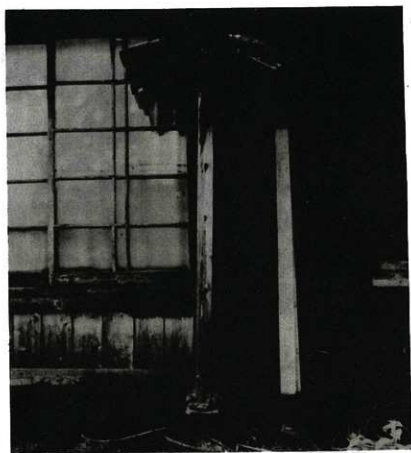
図版21 本座敷回廊上化粧野地及び垂木(上)(下)



図版 22 中庭内門跡(上)内門敷石(下)



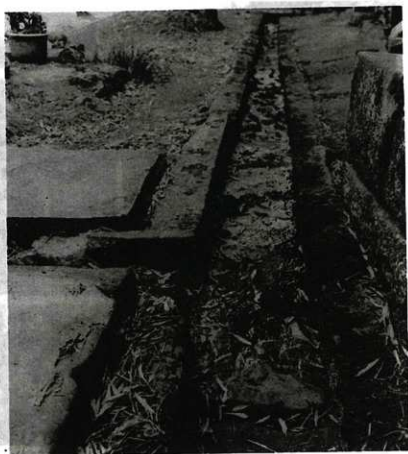
図版 23 内門支柱跡(上)柱敷石(水切りがある)(下)



図版 24 内門の1部(上)(下)



图版 25
家庭污水排水沟(上)(下)



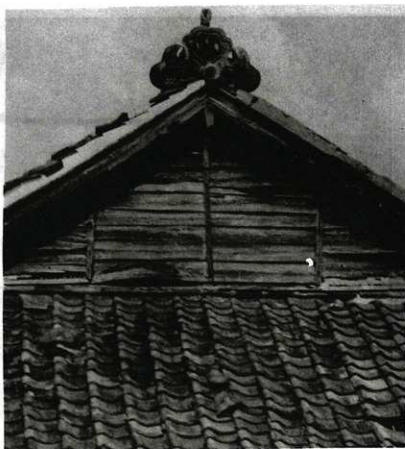
図版 26
住宅裏雨水排水溝(上)
雨水排水口(下)



図版 27 井戸(上)表門台敷石(下)



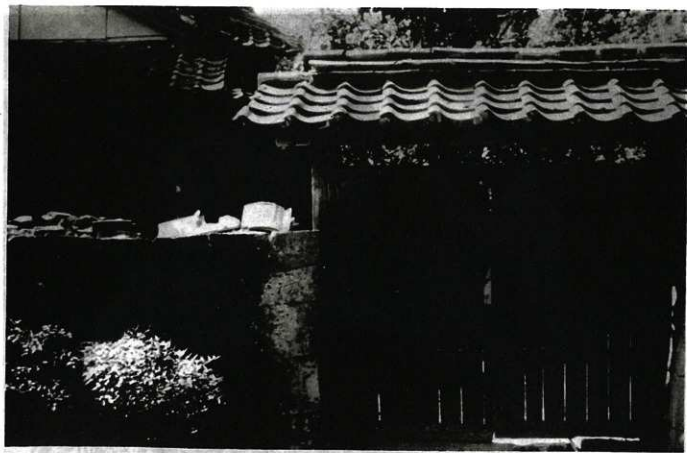
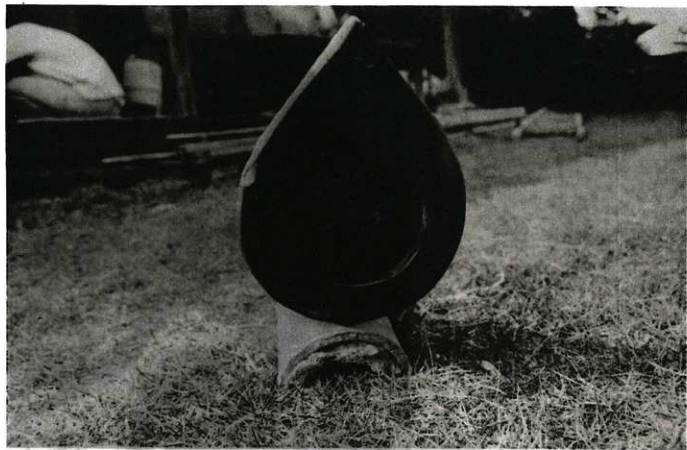
図版 28
屋根伏せ(上)
オニ瓦(下)



(下) 宮内省建築部(上) 宮内省建築部



图版 29 才=瓦(上)(下)

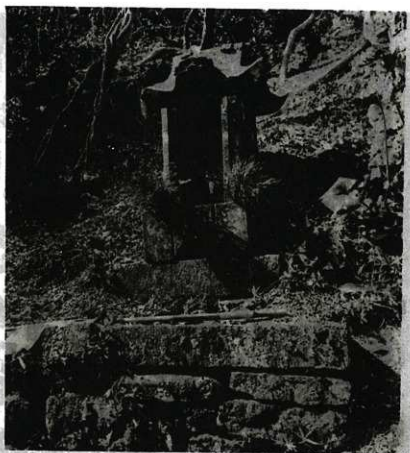


図版30 オニ瓦(上) 裏門(下)



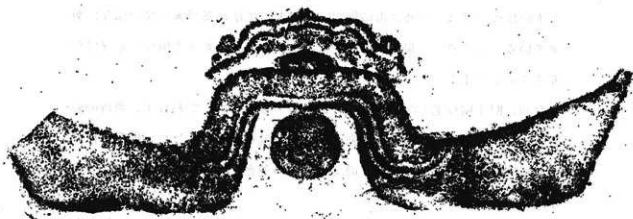
图版 31 石垣刻印洪水誌(上) 軒瓦(下)

ある夜、健固の夢枕にキツネが現われて祀ってくれるよう懇願したので裏の山園に祠を建立した。



図版 32 山園に祀ってある祠(上)(下)

考依当志



石門前有碑道碑

图版 33 祠屋根（前面）

孔 子 著 述 考 索 卷 一

孔子著述考索卷一
孔子著述考索卷一
孔子著述考索卷一

孔子著述考索卷一

孔子著述考索卷一

孔子著述考索卷一

孔子著述考索卷一

あとがき

市内には数多くの文化財が大切に保存されています。この中でも特に貴重なものについては、県及び市の指定文化財として法に基づき一層の保存に努めているところです。現在、計画的に文化財の実測調査を実施し、記録保存をすすめています。

今回、旧庄屋役宅としてはあまり改造の手も加えられておらず、当時の姿がしのばれる宗像家の調査を実施し、その報告をまとめました。内容的には種々疑問の点もあると思いますので、今後の調査と関係各位のご指導、ご教示をお願いします。

最後にこの調査に際し、ご協力いただいた多くの方々に感謝とお礼申し上げます。

本渡市教育委員会

本渡市文化財調査報告

宗 像 家 調 査 報 告 書

発行日	昭和58年3月31日
発行者	本渡市教育委員会 教育長 浦上恒雄
発行所	本渡市教育委員会 〒863 熊本県本渡市東浜町8番1号 電話本渡(09692)3-1111番

印刷・ナカムラ印刷

熊本県本渡市新町11~9
☎(09692)23242☎
